



冬になれば雪掘りが日課。
中央後ろ左に大の里。
この中の六人が角界で活躍。

はじめに

古きよき相撲部屋では、厳しくも経験豊かな親方が弟子を力士として指導し、母親代わりの女将おかみさんが食事をはじめ日々の暮らしの心情を支えた。表に立つ親方、陰で支える女将さん、その両輪が個性を発揮して特色ある部屋を築き、力士を育てたと聞かされる。

時代が変わり、女将さんが以前ほど深く関与しない部屋が増えていく。高卒、大卒の力士が大半を占め、人間形成の場であるよりも、プロとして勝負に勝つことが最優先される。つまり、身体を大きく強くし、勝つための技量の向上に重きが置かれる。

「結果がすべて」の世界だから、当然と言えば当然の流れだろう。女将さんにしても、たまたま結婚した相手が力士で、引退後、親方になった。だからといって義務的に女将の役目を務めたくはない、我が子の子育てと自分自身の生活を優先したいと考える親方夫人が多くなったようだ。実際、親方は日本相撲協会の構成員だが、女将さんの立場は曖昧あいまいだ。重い責務は求められながら、正式な立場や保証はないのだという。女将の役目を放棄する親方夫人が増えるのも仕方ない事情がある。

そんな中、アマチュアの世界には、十代の少年たちと寝食を共にし、親代わりになって力士を育てる「相撲部屋」がいまもある。その代表的な存在が、この物語の舞台である〈かにや旅館〉だ。かつて旅館だった名残でいまでもその名で呼んでいる。実は、新潟県立海洋高校相撲部の寮。ここにはプロなら「親方」と呼ばれる立場の田海哲也総監督と、女将さんの恵津子夫人がいる。かにや旅館で育ったOB監督、東京から〈かにや〉を選んできたコーチ、さらには地域の人たちと力を合わせて、二人は十代の少年たちの夢を支え育んでいる。

大関・大の里をはじめ、人気を集めつつある白熊、欧勝海、嘉陽らの関取衆もかにや旅館で十代を過ごした。「かにや旅館での六年間がなければ、いまの自分はありません。だけど、二度と戻りたくない地獄の六年間でした」。大の里は振り返る。

この本は、運命の糸に導かれるようにアマチュアの相撲部屋を受け持つことになり、いまや大相撲で活躍する人材を輩出するようになった新潟県糸魚川市能生町の〈かにや旅館〉に光を当てた物語だ。

目次

はじめに 2

序章

能生町が
人・人・人で
あふれた日

13

ラッピング列車のお披露目セレモニー
能生町にこんなに大勢の人がいたのか……

第一章

相撲部屋
〈かにや旅館〉の
誕生

23

相撲部の監督に誘われて相撲を始めた
小学一年からずっと一緒の幼なじみ
大学相撲部、地獄の寮生活
恵津子の実家の家業を継ぐという選択
叩き上げの先輩たちの厳しい洗礼
国体に向けた「県の強化委員長就任」の要請

第二章

有望な

少年たちが

集まり始めた

39

中高一貫指導体制で国体優勝を目指す
一年後に開かれた家族会議

三輪隼斗が石川県穴水町から能生に来た

深夜三時、高校相撲部の寮が火事で燃えた

スバルタから触発へ、指導者の葛藤

三輪隼斗ら中学生たちが初めて全国優勝を遂げた

中学生の佐藤貴信少年も稽古に来た

福島から高橋優太が、千葉から嘉陽快宗が来た

金沢大会の決勝、三輪の大将戦を泰輝少年が見ていた

第三章

中村泰輝

(大の里)が

来た

65

小学生で牛井大盛を三杯べろり

わんぱく相撲の五回戦で泰輝は負けた

「能生中に行って、強くなる！」

明るくて茶目っ気のある少年

能生中学でなかなか結果が出なかった

走行距離十七万キロの軽ワゴン車

悪い癖をすぐ直さなかった哲也の指導方針

中村泰輝と初めて会った、高校二年の春

第四章

〈かにや〉の 生活と 人間模様

81

大の里が「地獄」と呼ぶ寮生活
携帯もゲームも禁止。甘い青春のない日々
深く、静かな、相撲の基本稽古

厳しい稽古の後、「井三杯」が決まりの夕食が待っている
高橋優太（白熊）のいまだから笑える脱走劇
親元を離れた寂しさと孤独

ケガで、思い描いた夢に雲がかかる少年もいる
厳しい非難を浴びたイジメ事件

地元の人たちに愛される相撲部員
相撲部開発の人気商品「ごっつぁんカレー」

第五章

大相撲の 敷居は 高かった

103

村山大洋の不安

「プロには行かない」。三輪隼斗の固い決心
すべてを兼ね備えた後輩に夢を託した

国体団体戦で五連覇に王手

土俵下で大きなタオルを丁寧に畳む、後輩・栗田の献身
五連覇をかけた決勝、絶体絶命の大將戦

第六章

祝勝会前夜 母たちの 証言

121

いまは十人の「かにはや育ち」が角界にいる
恵津子より小さな嘉陽快宗がかにはや旅館に来た
かにはや旅館に惚れ込んだ母親に背中を押された
「明日は嘉陽の母ちゃんに着物を着せろ！」
「勇人は、かにはや旅館の六年間で変わった」

第七章

中村泰輝 から 大の里へ

133

教育実習で泰輝が残した武勇伝
心臓に悪い、トーナメントの戦い
二年連続アマチュア横綱に輝き、角界入りを宣言
卒業式のころ、ようやく部屋が決まった
入門前に、もう一度「丸刈り」にした新弟子
二所ノ関親方が四股名に託した、泰輝への期待
「自分は大卒なので、遊んでいる暇はありません」
後援者たちの率直な安堵
多くの親子は、なぜ間違えるのだろうか
元横綱・稀勢の里、二所ノ関親方の威厳

第八章

大の里

快進撃の

陰に

155

黒星からの土俵人生

大相撲の先輩力士は甘くなかった

三勝三敗、相撲人生を左右する大勝負

もう一人の恩師・村山智明の助言

怪物・落合の台頭

化粧廻し贈呈式直前、恵津子が贈った言葉

初めての結びの一番、「あの静けさが怖かった」

初優勝の翌日、約束を守った先輩・大の里

大関昇進、「唯一無二」を助言した恩師

第九章

〈かみや旅館〉の

未来展望

179

「モンゴルに行く」哲也の苦渋の決断

家族で能生町に移住してきたモンゴル人母子

相撲部史上初、女子の部員が入ってきた

土俵際の逆転、のど輪攻め、大の里の試練

「オレたちは兄弟じゃありません」

鳴戸親方の怒り、欧勝海への叱咤

勝負を超えて、哲也が描く「相撲のまち」の未来

次の大の里を育てる

エピソード
恵津子と哲也の明日

199

恵津子がアジアツアーを始めた
奄美大島で有名占い師が哲也の十年後を予言
高校生の旅立ち、大の里は三度目の優勝

あとがき

204

ブックデザイン 守先正
写真撮影 田海哲也、海洋高校相撲部、小林信也

表紙写真／海洋高校の校内にある相撲道場。



現在の（か）にや旅館。

大の里を育てたへかにや旅館物語



序章

能生町が
人・人・人で
あふれた日

えちごトキめき鉄道のラッピング列車。
右が大の里、左が欧勝海。

ラッピング列車のお披露目セレモニー

秋晴れに恵まれた午前十時、力士たちに先だつて田海哲也とえちごトキめき鉄道日本海ひすいラインの青海駅おうみに到着すると、駅前駅前の小さなロータリーには数十人の人ばかりができていた。

二〇二四年（令和六年）九月二十八日。秋場所が終わつた翌週の土曜日。両国国技館りょうごくの熱気がそのまま日本海側まで運ばれたようなときめきが小さな駅前に漂つていた。数十人と書いたが、青海駅前ではそれだけで「事件」と言つていい大騒ぎだ。普段は、通学・通勤の人がパラパラと行き交うくらいで、人が集団になる光景はほとんどない。その場所に、いま相撲界で最も注目を浴びる新星・大の里がやつて来る。

駅舎の正面には、大の里、白熊、欧勝海、嘉陽、四人の関取の等身大パネルが並べられていた。いずれもコバルトブルーの地に金色で海洋高校の校章が刺繍しゅうされた化粧廻しまわをつけている。四人とも〈かにや旅館〉で育ち、海洋高校を卒業して角界に入った。欧勝海だけが高校からかにや旅館に来た。他の三人は能生中学、海洋高校を通じて六年間を能生町で過ごしてゐる。

実のところ、この中に新潟県出身者はいない。白熊は福島県須賀川市出身、嘉陽は沖縄県出身だが千葉県市川市の小学校を卒業した。大の里と欧勝海は共に石川県河北郡津幡町出身。大相撲の場内アナウンスで「新潟県出身」と紹介される力士は四人の中にいない。だが、能生町の人たちは彼らが能生で育ち、能生に愛着を感じているのを知っている。だから、アナウンスとは関係なく、「能生育ち力士」として、我がことのように昇進を喜び、応援している。

詰めかけた町の人々は、満面の笑みを浮かべ、代わる代わる等身大パネルの脇に立ってスマホで記念写真を撮る。並ぶと力士の大きさが実感できる。とくに百九十二センチの大の里の隣に立つと、百八十センチの男性でさえ小さく見える。なんだか、そんな発見だけでも心がウキウキするからお相撲さんの存在感不思議だ。

大の里、欧勝海をひと目見よう、ひと言応援の声をかけようと熱い思いを抱いた住民たちがさらに集まってくる。

やがて、紋付き袴姿の新大関・大の里、十両・欧勝海の一行が青海駅前下車で到着した時、人々は一齐に拍手し、口々に感謝と応援の言葉を叫んで二人を出迎えた。

本当は、白熊と嘉陽も一緒に来るはずだった。しかし、白熊は秋場所中にケガをして休場、嘉陽も秋場所中に右足を痛め、療養中のため、イベントへの参加は叶わなかった。

これから、抽選に当たった約六十名のファンと両関取が一緒にこの日お披露目のラッピング列車に乗る。その「出発式」でマイクの前に立った大の里が、歓声に応じて挨拶をした。「お披露目の式に来るにあたって、お土産を持って来たいなと思っていました。おかげ様で二つのお土産を持って来ることができました！」

集まった町の人々が、さらに大きな拍手と歓声を浴びせた。お土産というのが、先週の「秋場所の優勝」と、場所後に正式に決まった「大関昇進」。その二つだというのは、言うまでもなかった。大の里は、いま用意できる最高のお土産を携えて「第二の故郷」糸魚川市に凱旋がいせんしたのだ。

さらに大の里の感謝の言葉は続いた。

「この青海駅は、練習が休みになって実家に帰省する時、父と待ち合わせた場所なんです。父が『デンカ』の仕事をしているので、自分は能生駅からここまで電車で来て、ここで父の車に乗って石川県に帰っていました」

大の里が、青海町の屋台骨を支える会社の名を挙げたため、歓声にいつそうの共感が混じった。父・中村知幸ともゆきは、ほぼ毎日のように、金沢かなざわから青海まで、県境をまたいでかつては「青海電化（現・デンカ 青海工場）」の名で知られた会社に資材を運ぶ仕事をしている。

四人の関取の写真がラッピングされた列車が、一行を乗せて走り出した。途中、糸魚川

駅でもファンと交流した後、能生駅までファンと記念走行を楽しむ。

車窓から見える田んぼや畑、草原のあちこちに人々が立ち、電車に向かって笑顔で手を振る光景がほとんど途切れることなく見えた。

お年寄りがいる。若い夫婦がいる。子どもたちがいる。犬がいる。

このような車窓の風景を、かつてこの地域で見た人がいるだろうか。これは、大の里、欧勝海、能生町で育ったお相撲さんの成長と活躍がもたらした、誇らしい出来事にほかならない。

もしこれが野球選手だったら、休日の朝、家から電車の見える場所までこんなに大勢の家族やご老人、子どもたちがこぞって出てきて、あんなにうれしそうな表情で手を振るだろうか……。

相撲が人々を惹きつける、温かな笑顔の輪を広げる、他のスポーツにはない不思議な底力を持つことを改めて感じさせられた。

説明が後になったが、糸魚川駅から能生駅まで、かつてはJR北陸本線が走っていた。北陸新幹線長野―金沢間延伸に伴い第三セクター方式の鉄道事業社が設立され、二〇一二年七月、えちごトキめき鉄道（通称トキ鉄）が誕生した（開業は二〇一五年三月）。正確に記せば、JR西日本の市振駅いちぢがから直江津駅なおえつまでと、JR東日本の信越本線しんえつだった妙高みよつう

高原駅こうげんから直江津駅までの二路線がトキ鉄になった。今回、そのトキ鉄の車体に、海洋高校出身の関取四人の写真がでかかとラッピングされる企画が実現した。アイディアを考え、資金を提供したのは千葉県に住む自称「鉄ヲタ」で相撲ファンの実業家・朱孝しゅたかしだ。トキ鉄のホームページ「イベント」欄に朱のコメントが載っている。

『トキめき鉄道のイベントなどに数多く参加し、糸魚川市の魅力も知ったが、全国に発信するためにもう一つ何かないかなと考えた時に大の里関がすい星のように現れた。このタイミングしかないと感じ、米田よねだ（徹とほろ）市長にその企画をお話しした。大の里関が2度の優勝と大関昇進を果たし、糸魚川が全国に名が知れたと感ずる。』

「大イおおチヨウを結ったら張り替え、そして必ず綱をとるので、そうなればまた張り替える。」
企業向けのふるさと納税制度を活用して、朱は糸魚川市に一千万円をふるさと納税した。市とトキ鉄はそれを資金としてラッピング列車を準備し、二年間の予定で走らせることに決まったのだ。

能生町にこんなに大勢の人がいたのか……

能生駅に着き、狭い階段を下りて改札を出ると、ラッピング列車に乗って到着した関取

二人や同行した我々の方が想像を超える光景に驚かされた。

駅前広場に、あふれんばかりの群衆が詰めかけていたのだ。その数は数百人に及ぶだろう。そこにいた誰もが、能生町では見たことのない状況に目を見張った。お礼の挨拶に立った大の里がその気持ちを一瞬に語った。

「六年間、能生に住んでいましたが、こんなに大勢の人を見るのは初めてです。能生には、こんなにたくさんの方がいたんですね」

人々が笑いに包まれた。みんなも同感だ。これだけの町の人が笑顔で集まっていることに、自分が、すぐうれい。大の里と欧勝海、そしてラッピング列車のおかげで、こんな風にみんなが集まれた。顔を合わせて、ひとつの喜びを共有できた。「盆と正月と一緒に来た」と言いたいところだが、最近はずも盆も寂しくなっている。失われつつある活気と人の心のつながりが突然、降って湧いたように生まれた。

笑顔のセレモニーは続く。海洋高校時代の担任の女性教師が、高校時代のエピソードを披露する。

「中村泰輝君（現・大の里）は、お茶目なので、海洋実習で十二人乗りのボートに乗った時、わざとボートを揺らして一緒に乗っている仲間を怖がらせました」

こんな暴露メッセージにも、二人は動じず、ただ苦笑して反論もなかった。

「さあここで、普通なら花束贈呈というところですが」

司会の女性アナウンサーが声を張り上げ、次のプログラムを紹介した。

何が始まるのかとあたりを見回すと、群衆の中から進み出たのは、かにや旅館の女将・田海恵津子だった。私を見つけて、照れくさそうに恵津子が小声で言った。

「何とか間に合いました。これ、普通の八個分くらいあるんです。いや九個分かな」

そう言われたが、恵津子が両手で抱えている黒い物体が何なのか、わからなかった。

「それでは、お祝いのおにぎりの贈呈です！」

アナウンサーに言われて初めてその正体が判明した。恵津子が抱えていたのは、音楽の授業で鳴らしたトライアングルよりさらにひと回り大きい、そしてふ厚い「巨大おにぎり」だった。

「運動会の時なんか、みんなにこれをひとつずつ持たせました」

あまりの大きさに誰もが呆気にとられ、顎が外れそうなほどぽかんと口を開けている。

「これを一人で食べちゃうんですか？」

アナウンサーに訊かれて二人は、「はい」と、涼しい笑顔で答えた。

駅前の大群衆。能生育ちの力士が熱い眼差しを浴びる光景にひとときわ熱く感じ入る人物がいた。総監督・田海哲也だ。哲也は長年の記憶と様々な喜怒哀楽をかみしめていた。

(六年どころじゃない、こんな光景はあの時以来、五十年ぶりだ……。いや、あの時より今日の方が人も多いし、何だかみんなが感激している……)

あの時、というのは、哲也が小学生だった夏。同じ市内の糸魚川商工高校(現・糸魚川白嶺^{はぐれい}高校)が甲子園出場を決めた。野球少年だった哲也は、糸魚川駅まで行ってユニフォーム姿で駅頭に立つ選手たちを目に焼き付けた。さらにジツとしていられず、小学生なのにたった一人で甲子園球場まで応援に出かけた。

(自分も必ず甲子園に行く)

固く誓った。その夢は高校時代に頓挫してしまふ。だが、ふとしたきっかけで野球から相撲に進路が変わり、指導者として相撲に打ち込んだ結果、あの糸魚川商工の祝賀会を超える風景を、自分が手塩にかけて育てた弟子たちが成し遂げた……。まさに夢のようだった。

これはもちろん大の里、欧勝海の人気のお賜物だが、間違ひなく田海哲也が演出したものだ。哲也と恵津子夫人の献身がなければ、この大群衆の光景は生まれなかった。哲也はそう思うと、感無量。涙腺が決壊するのを抑えきれなかった。

その日の思いを哲也自身がフェイスブックに投稿している。

《私の夢は……。五十年前、糸魚川商工が甲子園に出場！ 糸魚川の駅が市民で埋め尽く

されました！ 小学生の私は一人で甲子園まで応援に行き「スポーツはこんなに人を感動させるんだ」と思いました。

時代は変わり、現在まで（相撲で）優勝も重ねてきましたが、アマチュア相撲はマイナースポーツであり、祝勝会を何度も開かせていただきましたが、市民や相撲を知らない人を取り込むことは到底できませんでした。

今回、様々な縁の下の力持ちの方々が立ち上がり、昨日のセレモニーとなりました。感無量です！ 勝つこと、上に上がることは大事な夢。しかし、その上には、さらに皆で喜び、皆が共有・共感・感動することも大事な夢です。

大の里、白熊、嘉陽、欧勝海ほか六名の力士は、勘違いせず、色々な方々が目に見えない所で支えています！ 応援しています！ それがわかる力士になってください！ 謙虚で愛される力士になってください！

「思い続ければ石の上にも花が咲く」

諦めず続けて来て良かったと思います。

今日も、いつも通り九時から稽古です！ 能生の街にはいつも通り人はあまり歩いていません！ 現在、将来をになう高校生やジュニアがいます。幸せを噛みしめて頑張ります。》

大の里を育てたくかにや旅館物語

小林 信也

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定 価：1,980 円 (10%税込)

発売日：2025 年 5 月 26 日

I S B N：978-4-7976-7464-4

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)